

小説家高橋和巳再読

——ある研究室伝説の誕生——

中原章雄

はじめに

一九六三年秋、そのころ立命館大学文学部の専任講師であった高橋和巳は、「文学思想史」に関する九回の連続講演を行っている。それは、当時、立命館の人文科学研究所と読売テレビとの共同企画になるテレビ大学講座のプログラムの一つであった^①。この企画には、文学部のほとんどの教員が参加したようである。

この連続講演で高橋が最初に取り上げた演題は、「文学と運命」であった。文学思想史を論ずる場合に、運命とのかかわりから始めるというのは、取り立てて奇異なことではないであろう。にもかかわらず、この最初の演題は、その後の夭折に至る高橋の生き方を暗示するかのようでもある。

少なくとも、若い大学教師高橋和巳が、テレビ講座という場で文学を論ずるに当たって、「運命」という重い言葉を選び取った事実を、われわれは記憶にとどめておいて良いであろう。

その高橋は、立命館大学を辞めて作家活動を続けながら明治大学に移り、さらにそのあと、一九六七年に母校京都大学文学部に助教として戻っている。これは、東大・日大紛争の前年であり、その翌年の一九六九年に京大・立命大の紛争が起こることになる。

日本の大学が激震に見舞われていたこの時期に、高橋は当然その震動

に敏感に反応しつつも、作家としての短い経歴のなかでも極めて充実した、しかし慌ただしいほどの創作活動を開花させていた^②。こうした、かぎりなく貪欲な高橋の精神の軌跡にたいして、本稿が意図するのは、若い高橋がこの時期に見いだし『わが解体』のなかで綴った、小さな挿話を思い出し、その虚実を検証する作業にすぎない、しかしながら、わたしがこだわるのは、それが二年後の高橋の死と直結しており、晩年の高橋の心象を象徴する意義を感じるからである。

ところで、ここで高橋の広範な行動半径と、些細な作業との間を架橋するかもしれない、一つの事実を、彼の年譜から拾い出しておこう。京都大学に移る直前の一九六七年四月中旬、高橋は、文化大革命の真っ只中にある中国を、『朝日ジャーナル』の特派員として視察旅行する。

彼は、広州・上海などを経て「北京市革命委員会成立の前夜に北京に到着」し、「革命」の熱気に溢れる市内を歩き回ったという。一九六五年から六年にかけて彼が創作した『邪宗門』で一番書きたかったのは、「在りえざりし歴史をもとめて武装蜂起する場面」だったという。この小説刊行後の現実の激動の中で、歴史は高橋にどう見えていたのだろうか。とはいえ以下の作業の鬱陶しさは、緩慢な老人の筆を鈍らせずにおかない。にもかかわらず、ともかく筆を進ませたのは、大学に勤務してきた義務感であり、記憶を書き留めるのは、隠蔽や無知よりも、忘却や忘却を装うことよりも、許されると思うからである。

一 『わが解体』の時代

三島由紀夫が、「いま大学は荒廃しているが、文壇も荒廃している」と評した言葉が引用されているのを、一九六九年の初めごろ、ある新聞の文芸時評で読んだ記憶があった。

高橋和巳の『わが解体』が雑誌『文芸』に連載されたのは、この一九六九年という年である。^③その時評では、こうした自分の勤務校の内情について、教員自身が明け透けな報告を、いかに誠実な動機に基づくによ、同時進行的に雑誌に寄稿するということが両者の荒廃の典型として挙げられていたと覚えていたのであった。

最近、必要があつて当時の新聞の縮刷版を読んでも見ると、そこには『わが解体』のことは言及されておらず、文芸時評は高橋とは違う小説家の、大学紛争を扱った小説を「荒廃」の例に挙げていたのであった。^④

高橋は『わが解体』のなかで立命館大学、とくに文学部のことにも触れていて、後によく知られるようになったのは、その部分であろう。高橋は、一九六〇年から六四年まで立命館の文学部で文学の講義も担当しながら、中国語の講師をしていた（短期間だけ、彼と在職期間が重なるわたしは、彼が減多に出てこない教授会で、延々と続く論議のあいだ、いかにも居心地悪そうにしていた様子を覚えている）。

しかしながら、雑誌掲載時には、わたしの知るかぎり、立命館の文学部でそれを話題にする人は誰もいなかったように思う。紛争に明け暮れ、紛争に翻弄される教員に雑誌論文に関心をもつ余裕はなくて当然なのであるが。^⑤

高橋は、彼が所属している京都大学文学部教授会について、大正期のある教授会人事から説き起こして、いまでも教授会が「それ自体としてもっている『封建性』」と、彼自身がそれを碎きえていないことへの反省

を述べつつ、学生対策的な教授会論議よりも、「共闘系の学生たち」と「民青系の学生たち」というセクトを問わず、学生集団の論議の方が「論理的に質が高い」ということを強調する。

このあたりの議論は、紛争をめぐる問題を、集団と集団との「論理的な質」ということにのみ限定して比較していて、みずからも政治的な学生運動を経験し、それを踏まえた上で紛争中の学生集団と接触しているはずの高橋にしてはナイーヴな甘さがつきまとうが、それよりも注目されるのは、これらの問題が、じつは長い前置きであったかのように、そのあとに立命館のことが出て来るのである。

ところで、立命館大学の紛争については、言うまでもなく、学園の正史である、大学編『立命館百年史』（以下原則として『百年史』と略す）があり、その第二巻（二〇〇四年刊）のうち、約一〇〇ページもが紛争に充たされ詳述されている。本稿でも必要なかぎりは、それを参照している。

しかしながら、『百年史』は当然のことではあるが、最大の問題であった本部封鎖に関して、その評価や、解除をめぐる方法上の対立と、入学試験粉碎を叫ぶ全共闘派と、その実施に至る経緯を中心に記述されており、各学部の実態についてはほとんど触れられていない。

また、末川総長などを例外として、少なくとも紛争期に関しては、役職者をも含めて個人名は挙げないことを原則としているようである。^⑥高橋和巳の『わが解体』が、いまでも、情報源として読まれるのは、こうした理由にもよるであろう。

二 研究室の灯

最初に『わが解体』を引用しよう。

立命館大学で中国学を研究されるS教授の研究室は、京都大学と紛争の期間をほぼ等しくする立命館大学の紛争の全期間中、全学封鎖の際も、研究室のある建物の一時的封鎖の際も、それまでと全く同様、午後十一時まで煌煌と電気がついていて、地味な研究に励まれ続けていると聞く。団交ののちの疲れにも研究室にもどりのある事件があつてS教授が学生に鉄パイプで顔を殴られた翌日も、やはり研究室には夜おそくまで蛍光がともった。内ゲバの予想に、対立する学生たちが深夜の校庭に陣取るとき、学生たちにはそのたった一つの部屋の窓明かりが気になって仕方がない。その教授はもともと多弁な人ではなく、また学生達の諸党派のどれかに共感的な人でもない。しかし、その教授が団交の席に出席すれば、一瞬、雰囲気が変わるという。無言の、しかし、確かに存在する学問の威厳を学生が感じてしまうからだ。^⑦

この長い文節は、二つに分けて読むことができる。前半は、「S教授」が学園紛争中も深夜まで研究室で「地味な研究」に励み続けた、ということである。後半は、そのS教授の存在は、団交の席に出席すれば「雰囲気が変わる」ほどに、学生たちに「学問の威厳」を感じさせる、という影響力の指摘である。この前半と後半の記述を、教授が「鉄パイプで殴られた」という事件のことが、つなぐように記されている。

「立命館大学で中国学を研究される」という限定的説明からして、S教授とは文学部の白川静教授であることは明らかである。教授が深夜まで研究室にこもっていたこと、それが紛争中も続いていたことは、当時の立命館大学文学部ではかなり良く知られていた事実であった。高橋の記述が何よりも、紛争という異常事態のなかでも変わることなく続けられた、学問研究者の孤独な営為を取り上げることを用意したものであり、

たしかに、その限りでは正当性のある、きわめて重みのある記述であったことは疑いない。

しかも、それが、彼自身が言うように、「紛争の期間をほぼ等しくする」京都大学文学部中国文学科の助教授であり、紛争の直後になかば自爆するように死去した高橋によって語られていることに、さらなる重みが加わって受け取られたのであった^⑧（当時、鴨川を隔てた二つのキャンパスにあった両大学の紛争が同時進行的に推移したことは、『立命館百年史』にも明確に指摘されている）。

だが高橋は、この重みのある事実の指摘に、後半のような付随的な叙述をたつぷり加えたのであった。結論から言えば、その付け加えられた部分はすべて虚構である。小説家高橋和巳の想像力の産物、しかも遺憾ながら、高橋ほどの小説家にしては、あまり上質と言えない想像力の産物である。だが、彼はなぜそれを敢えてしたのであろうか。

高橋は、右の引用のあとに、「たった一人の偉丈夫の存在が、その大学の、いや少なくともその学部の抗争の思想的次元を上におしあげるということもありうる」と続けている。いかにも高橋らしい言葉である。ここには、研究領域を等しくする学者への敬慕の念と、さらにその像を理想化しかねない危うさも、顔を覗かせている。高橋が、みずからが所属する学部と教授会の混迷と「思想的次元」に絶望し、自分自身の無力さに限りなく責め苛まれていたであろうことを考えるなら、彼の善意はとりわけ明白であり、われわれは、彼の心情を思いやり、拙劣ともいふべき虚構を、このままそつとしておくべきかもしれない。

しかしながら問題は、紛争の現実が歲月とともに忘れられるにつれて、虚構の部分が事実とともに、いわば聖別されて受け取られてきた節があるように思われることである。

以下、多少とも煩瑣にならざるをえないが、高橋の記述を検証するた

めにやむをえない。また、それ以上に、当時のことを知る限られた者として記録を残す義務がある。先に述べたように、『百年史』にも、紛争時における文学部固有の事態については全くといってよいほど記されていないし、また、『立命館大学文学部の五十年』（一九七七年）も、その当時の事情から、六九年の記述は見送っているからである。^⑤

引用部分には、「団交」という語が二度出て来る。そしてS教授がその場の雰囲気を変えるほどの威厳を学生たちが感じるとされるのだが、紛争中に白川教授が文学部の学生集団との交渉の場に出席されたことはなかった。

文学部教授会と、全共闘系の文学部闘争委員会との間では「団交」と呼ぶべきものは、事実上一度だけだった。その時、延八〇〇名ほどの学生を集めて深夜まで一〇時間以上にわたり凄まじい交渉が続いたが、教員の出席者は、その際に倒れた文学部長代理と学生主事代理のわたしを含め、執行部の三名だけであった（大学全体の、学部長理事と全共闘との三回にわたる団交については、『百年史』に詳述されている）。

一方、「全員加盟制」を主張する文学部自治会・学友会との間では、ほとんど毎週のように激烈な交渉が行われたが、ここでも教員側の出席者はほとんど執行部だけであった。（自治会が「拡大」形式の交渉を要求する場合には、専攻主任が加わるのだが、中国文学専攻の主任は、唐詩の研究者である高木教授だった。）

事実以上のようなのであるが、わたしは高橋が言う、白川教授が体現したとされる「学問の威厳」を否定しようとしているのではない。ただ、当時の立命館の文学部における学生との交渉の場に関するかぎり、全共闘系であろうと、民青系であろうと、学生集団との交渉の場において特定の教員個人の出席が、いささかでも影響を及ぼしえるような雰囲気ではまったくなかったことを述べておきたい。

大学に批判的な言辞を残して辞表を出した多くの文学部教員に対しては、自己批判して復帰せよ、と自治会系の学生がひたすら要求するとき、また一方、大学が自治会・学友会を支援したと文学部闘争委員会が追及するとき、「交渉」の場は、ただ凄まじい怒号と野次に包まれるばかりであった。S教授でなくとも、一人の威厳ある教員の出席がその「雰囲気を変える」ようであったなら、事態はどれほどよかったことであろう。

奇妙なことは、高橋自身が当時の京都大学文学部でおそらく同様の熾烈な交渉の場を何度も経験していたはずであり、教員個人の無力さを痛感していたはずでありながら、立命館大学については、一応伝聞という形にしろ、このような非現実的な楽天的なことを書いていることである。煩わしいことであるが、高橋の想像力の奇妙な現れ方に関して、もう一つ付け加えておかねばならない。

三 「鉄パイプで頭を」

さきの引用のなかで、「ある事件があつてS教授が学生に鉄パイプで頭を殴られた」と高橋はこともなげに書いていた。

いかに紛争下の大学のこととはいえ、無抵抗な老教授が学生に頭を殴られる、しかも、活動家のおおくが携行していたとはいえ、「鉄パイプ」という武器で殴られるというのは、紛争が深刻化した立命館でも考えられない事態であった。

ここで高橋の意図は、明らかに、そのような打撲を被ったにもかかわらず、その異常事は、つぎの日に、老教授の研究室における勉強には、いささかの違いも齎さなかったことを強調することにあるのであろう。

しかしながら、紛争中にそんなことが、いや、それに似たことでさえ、起こったとは考えられない。

うかつなことだが、わたしは最初『わが解体』を読んだとき、この部分を読み落としていたらしく、そんなことを高橋が書いているのを知らずにいた。

ところが、もう二〇年ほど前、『解体』を読み返す機会があった。そのきっかけは次のような事情である。大学の休み時間に年上の同僚と雑談していて、話題が紛争時のことになった。「白川さんが学生に殴られた時」、と彼が云ったのである。驚いて問い返すと、「ほれ、高橋和巳が『わが解体』で書いているじゃないか」という言葉が返ってきた。同僚は教授会でも古参で情報通だったが、その彼もまた、この件に関しては、学外者の高橋が書いたことだけを情報源にして、半ばそれを信じていたかのようなのである。

高橋はセクト名を明らかにしていないが、その頃の立命館では民青系自治会・学友会は暴力反対を標榜していたので、「S教授」を殴打するほどの蛮行を取っていたのは、とうぜん全共闘派ということになるはずである。

おそらく高橋の意図とはまったく無関係に、皮肉なことに、彼のお墨付きによって、「立命館大学教授白川静、鉄パイプで顔面を殴打する」の報は、「暴力学生」の蛮行として京都の大学人の間を駆け巡ったのであろう。

京大の事態を身近に体験している高橋が、老教授が鉄パイプで殴られたという情報になんの疑問も持たなかったのは不思議だが、おそらく彼にとっては、暴行の現実性や犯人のセクトの識別よりも、白川伝説を補強することの方に関心が優先し集中したのであろう。

それはともかく、もう一度繰り返すが、S教授が白川教授だとすれば、殴打事件というのは考えられない。

白川自身は、一九九九年に『日経新聞』に連載した「私の履歴書」の

なかで紛争当時のことに言及し、「この学校では、全共闘派がいわば鎮圧された形で終わった」と書き、「その八月、高橋和巳君の『わが解体』が出て、私のことについての伝聞を記している」と述べている。

さらに紛争当時は、高橋が京都大学に戻っていたことを記し、「京都の各大学の両派の学生が、それぞれ集団で巡回するので、いろいろ伝聞されたことがあるのであろう」と高橋の記述を、とくに肯定も否定もせず、軽く受け流している。^⑩

長期間にわたった立命館の紛争中は、どのような異常と思えることもありえたには違いない。学生集団が激突しているとき教員が巻き込まれ、さまざまな被害にあうことは、自分の経験からも否定しない。

しかし、もう一度繰り返すが、無防備の老教授がいきなり鉄パイプで殴られるということは考えられない。しかも、高橋は「団交」の後らしいことを示唆しているが、白川教授が団交に出なかったことは既にのべた通りである。

学生の内ゲバによる負傷者についても、わたしは学生主事として学部内でだれよりも情報を掴んでいる立場にいたはずだが、まして教員が個人的に襲われるというような被害を聞き漏らすことはありえなかった。しかも、学生委員として最も信頼できる協力者には、東洋史専攻のO専任講師（故人）もいて、彼は白川研究室に最も頻繁に出入りしていた人であり、しかも学部内のことに関しては驚異的な情報網の持ち主でもあったが、そのO講師からも白川教授の被害についてはまったく聞かされることがない。

犯行の有無についての検証が長すぎた。だが、長くなったついでに、もう一カ所、高橋の記述を見よう。

内ゲバの予想に、対立する学生たちが深夜の校庭に陣取るとき、学生

たちにはそのたった一つの部屋の窓明かりが気になって仕方がない。

立命館大学が広小路キャンパスを引き払ってから、もう何年になるうか。広小路とその周辺の古戦場を知らない教員、学生、卒業生も増えてきているから、野暮な検証もまったく無意味ではなからう。

要するに、広小路キャンパスでは、深夜の校庭に陣取った学生たちには、白川研究室の灯は見えるはずがなかった。大学の正門を入れて、彼らが陣取る広場と、研究室棟の間には時計塔のある高い学舎が聳えていて、視界を遮っていた（もちろん、見える見えないにかかわらず、休むことなく学間に励む老研究者に思いを馳せる学生はいたであらう。京大の高橋の周囲にはそのような学生が集まったかもしれない。だが、ここでも高橋の関心は伝説を補強する作業にあることは変わりがない）。

ここで高橋は、深夜の校庭の闇と、研究室の孤灯との視覚的コントラストを強調しているかのようである。だが、これまた、事實は、当時のキャンパスは、全共闘が封鎖する本部棟も、自治会系学生が対峙して陣取る学舎も、ともに不夜城のように電光に満ち満ちていて、彼らを明々と照らし出すのであった。白川研究室の孤灯がかりに視野のうちに入っていたとしても、それは光の大海にすっかり没していたであろう。

その上、深夜のキャンパスは、学生たちが老学究の孤独な営為を静かに思いやる場では必ずしもなかった。ほとんど毎晩、真夜中になると、封鎖中の本部棟屋上の拡声器から、闇としじまを引き裂くように、インターナショナルが高らかに響き渡り、それに続いて、「本日また、宮本修正主義集団は」と始まる北京放送の、日本共産党糾弾の報道が音量一杯にキャンパスを揺さぶり続けるのだった。

四 「肉色の粘膜」

わたしの拙い筆によって、今日の平和そのもののキャンパスしか知らない人々に、当時の雰囲気伝えるのは至難の業である。ここで、同僚であった詩人の歌を紹介して、あの陰惨で陰湿な、しかし確実に存在した日々を、もう一度呼び出そう。

リンチ受けし者うつぶせに背を曲げて吐きつぐ肉色の粘液と血と^①

歌の作者は、当時をなまなましく詠んだ何首かを残しているが、文学部教員としては、むしろ紛争と距離を置いてあの日々を生き続けたかに見える人である。しかしながら、そのような生きざまとは無関係に、歌はきわめて的確かつ簡潔に事件を切り取った写真となっている。彼の友人であった白川静は、歌人の別の歌について、「的確な場面の設定」と「映像的な把握」を賞賛している。ここに詠まれているリンチ事件の被害者を、私は自分では見ていないが、複数の目撃者から、その直後に事件を知らされたことをはっきりと記憶している。

もう一首引用しておこう。

五階より落つる会議用大机着地の刹那板切れと化す

これは、二月一八日、全共闘系の法学部闘争委員会が存心館を封鎖したときの攻防を詠んだものである。

この時の攻防は、自治会学友会系学生にとっては封鎖解除に失敗した一月二二日の復讐戦的な意味を帯びた総力を挙げての戦いであり、怯えきった全共闘派は、大教室に固定された六人掛けの大机や達磨ストープまで全部投げ下ろし、火炎瓶も使って死に物狂いで抵抗し、双方で二五〇名もの重軽傷者を出したのであった（『百年史』九三一ページ参照）。

末川総長が「京大で出来たことが立命にできないはずはない」という、アジェーションともいふべき文句で入試防衛の先頭に立ち、その成功を祝ったのは、この攻防のほんのしばらく前であったと記憶するが、紛争は最も陰惨な局面を迎えていたのであった。

一晩中続いた攻防が静まり、夜が明けてから、もうだれも見えないキャンパスを、わたしは歩いた。火炎瓶で焼け焦げた紙片などが寒風に舞っているばかりだった。

自分の部屋に戻ろうとしたとき、白川教授が研究室棟の方から出て来るのに会った。白川が研究室で夜を明かしたとしても不思議ではない。だが、この記憶は、高橋とは異質ではあっても、やはり幻であったのかもしれない。だがとにかく、その時の「わたしたち」は、なにも言葉は交わさなかった。どんな交わす言葉があったろうか。

それよりも、この節の終わりに、「私の履歴書」の先の引用に続く部分を引きおこう。

当時大学は殆ど閉塞の状態であったが、私は出校をやめるわけにゆかず、出校を続けた。家が老朽化していて、多くの書を取り入れることができず、専ら研究室で仕事をしていたからである。これは大学に籍をおいて以来の、私の生活習慣であった。私の生活習慣を破壊する権利は、誰にもなかった。

ここにすべては言い尽くされている。高橋が追加した部分は彼自身が必要とした装飾にすぎない。紛争下のキャンパスで深夜まで研究室（それは、狭い通路を挟んで、二月十八日の激闘の舞台となった学部棟のすぐ裏に位置していた）にこもり、老身に鞭打って研究に精励しつつ生きること、そのためにどれほどの信念と情熱と気力を要したかは誰にもわ

からない。¹²

駆足のデモ先導の笛と叫びこわばるうなじを打ちつつ迫る

昼間でも、出席者の乏しい教授会の最中に遠くから笛が聞こえた途端に、多くの教員が腰を浮かすのだった。深夜に笛が響き渡り学生集団の「定期便」が襲来するとき、分かっているもその不気味さは独得のものがあつた。

もう退職が近いころだったろう。やはり何かのおりに話が紛争時のことになって際に、悪戯つ子のように笑いながら、老先生はこちらに顔を近づけて、面白かったなあ、とただ一言言われたのだった。

研究室に閉じこもり研究に没頭しながらも、おそらく動物的なカンで白川は絶えず周囲に働かせていたのだったろう。面白かったという言葉は、それまでの日常とは違うそうした異常なほどの緊張感こそが言わせた言葉であろう。

それが野次馬根性とはどれほど掛け離れたものであるは、彼の『孔子伝』を読めばよい。とりわけ、その中公文庫版の「あとがき」を読めばよいだろう。

五 「遙かなる美の国」

『文芸』の「高橋和巳追悼号」の最後に、遺稿として未完の「遙かなる美の国」が収録されている。¹³ そのなかに、「憧憬、なんと懐かしい言葉だろう」という一節がある。

漢語のヴォキヤブラリに不自由しないはずの高橋が、「憧憬」という、むしろ高校生も知っている熟語にたいし、ことさらに感嘆の言葉を発している。それほどまでに彼の大学への絶望は深く、それほどまでに彼の

「憧憬」への憧憬は烈しかったのであろう。

『わが解体』の「偉丈夫」への憧憬は、彼に現実とは接触しない夢を語らせた。白川教授は、田舎芝居染みた動作や演技とは無縁の人であった。高橋自身も京都大学の紛争で苛酷な現実を痛いほど知悉していたであらう。

にもかかわらず、死をまえにした高橋が「憧憬」という言葉に、またこの世での憧憬に、最後までこだわったことを、だれが笑うことができようか。

わたしは、細々としたことを書き連ねてきた。だが時には、われわれが、死期を悟っていた他大学の教員の情報に、あの時代の立命のキャンパスの有名な逸話を、依拠している小さくない事実を想起してもよいだろう。

注

- ① 高橋の講演は、『高橋和巳・文学講座』として、一九七六年に河出書房新社から出ている。この本の出版までの経緯については川西政明の「後記」に述べられている。
- ② 読売テレビの講座は何年か続いていたらしいが、わたしが立命館に勤務することになった一九六四年には、もう終了する話になっていたようである。
- ③ 高橋の文学活動については、主として、『文芸』（河出書房新社）の高橋追悼特集号（一九七一年七月）巻末の年譜を参考にした。
- ④ 「我が解体」は、六、七、八、一〇月号に掲載されたという。単行本『わが解体』には、ほかに「内ゲバの論理はこえられるか」などのエッセイも収録されている。
- ⑤ 『毎日新聞』一九六九年の安岡章太郎による文芸時評。
- ⑥ わたし自身は、雑誌『文芸』を、そのころ京都市内で小さな本屋を開いていた父の店で読んだのであった。研究室に週の半分ほどは泊まって

いたわたしは、それ以外の晩も郊外の家にはたまにしか帰らず、大学に近い父の家で半ば待機していて、学生課員のだれかから内ゲバや臨時の会議を知らされると、キャンパスに駆けつけるのだった。

そのころは第一級の有能な職員を網羅する立命館の学生部も、学寮を巡る激烈な交渉のなかで、この時期には（今日では信じがたいことだろうが）学生部長・課長・次長がそろって辞表を出し、各学部の学生主事（当時の呼称は補導主事）も、私も含めて代理主事がほとんどで、組織的には解体寸前に追い込まれていた。ただし、そのあたりのことについては、ほぼ『学園史』にも記されている（九二三ページなど）。

⑥ この点は、『学園史』の第一巻が個人の事蹟をかなり明確にしているのとは、かなり異なっているようである。

⑦ 『わが解体』一六ページ。『わが解体』からの引用は、すべて参照しやすいように、河出文庫版（初版昭和五五年）による。

⑧ この時期の高橋は最も良く読まれた文学者の一人だった（彼の追悼号・追悼特集は何種類も出版された）が、立命館の社会学部の教授が、『わが解体』を「自虐的駄文」と評したことは、いまでも記憶に残っている。「自虐的」というのは、かならずしも高橋だけに向けられた言葉ではなかったようである。

⑨ 『立命館大学文学部の五十年』（昭和五二年）には、紛争に関して、「年表」に「この頃から立命館にも学園紛争起こる」と記されているだけである。紛争から一〇年近い歳月が経過していたにもかかわらず、当時の文学部としては、この簡潔無比な記述が精一杯であったのだろうか。

結果的には、マスコミから厳しい批判を浴びることになったのだが、編集責任者で、しかも日本史専攻の教員である故衣笠安喜氏は、おそらく紛争当時の苦渋を二度経験されたことであらう。

⑩ 『白川静・回思九十年』（二〇〇〇年平凡社）六二ページ。

⑪ 『和田周三全歌集』（短歌新聞社二〇〇三年）一三四ページ。白川の批評は、『全歌集』に挟み込みの付録に収録されている「懐念周三兄」と題するエッセイによる。

⑫ わたしの研究室は二階であるが、中庭を隔ててもう少し裏手にあった。最大の幸運は、廊下と反対側の窓が廬山寺の庭に面していたことであっ

た。有名な、箒目のない白砂の美しい「源氏の庭」に無傷で着地できる自信は皆無だったが、万一必要な場合に一応退路があることは限りなく不安を軽減してくれた。

⑬ 『文芸・高橋和巳追悼号』（河出書房新社一九七一年七月）一六七ページ。

〔付記〕

小稿のきっかけは文学部八十周年記念座談会に出席したことであった。だが伝説の検証を意図しながら、別の伝説を補強したことを恐れる。一

つの事実を記しておきたい。

一九六四年、文学部着任早々、私は「人文学科入門」を担当した。茫漠とした新設科目に途方に暮れていた時、オリエンテーションに助言者として出席されたのが白川教授だった。二部が専攻を廃し人文学科に統合した初年度で、先生は文字通り抜本的改革の責任者二部協議員であった。本稿は、四〇数年前のご助言へのささやかな感謝をも意図している。

（本学名誉教授）